

活 動 報 告

共同研究奨励金グループ活動報告書

「表象としての〈日本〉—国際日本学の新展開—」

イギリスにおける日本研究の現状—ロンドン大学、シェフィールド大学、
オックスフォード大学の日本研究機関を訪ねて

村井まや子

神奈川大学の共同研究「〈表象〉としての日本」の研究課題の一つである海外における日本研究の現状の調査を行うため、イギリスで日本研究の分野において主導的な役割を担うロンドン大学、シェフィールド大学、オックスフォード大学の日本研究機関を2006年8月に訪ね、各研究機関の所長と図書館司書の方々にインタビューに応じていただいた。質問項目は教育と研究の両面から日本研究の現状について尋ねるもので、ロンドン大学とオックスフォード大学では所蔵図書についての調査がそれに加わった。以下に訪れた順に各大学での調査結果を報告する。

ロンドン大学 SOAS (アジア・アフリカ研究学院)

ロンドン大学を構成するカレッジの一つである SOAS (School of Oriental and African Studies) における日本研究は、1916年の創立以来ヨーロッパにおける日本研究の中核をなしてきた。SOASの日本韓国言語文化学科は、人文・社会科学の分野において多数の優れた教授陣を擁する世界屈指の日本研究教育機関である。SOAS 日本研究センター所長のタイモン・スクリーチ教授にお会いして、同大学の日本研究の現状についてうかがった。イギリスの大学では通常3年間で学位を取得するが、SOASの日本研究の学位は4年間の課程であり、最初の2年間で日本語と日本についての知識の基礎を修めた学生は3年目に日本の提携大学(北海道教育大学、慶応大学、早稲田大学、東京外国語大学、大阪大学、同志社大学他10大学)で1年間の研修を受け、4年目に日本語の資料をもとに卒業研究を行う。SOASでは日本研究を専攻する学生は日本経済が振るわなくなった90年代前半以降も減少しておらず、前年度は60名の入学定員に対して約600名の応募があったそうだ。興味の対象は近年、ビジネスに関する分野から現代文化や文化人類学などに関する分野へと移行してきており、メディアや旅行などを通してイギリスにとって日本が日常的に接触する機会の多い身近な存在となったことがそういった変化の背景にあるようだ。しかしイギリスにおける日本研究は財政的には厳しい状況にあり、今後は優れた成果をあげることで少数の研究機関に資金と人材が集中することになるだろうとスクリーチ教授はみる。スクリーチ教授は日本美術史と視覚文化論が専門で、近著『江戸の英吉利熱—ロンドン橋とロンドン時計』ではイギリスと鎖国下の日本との視覚交流を新美術史学の手法で解き明かしている。多摩美術大学客員教授を兼任し、イースト・アングリア大学付属のセインズベリー日本藝術研究所の設立(1999年)にも携わるなど、国際的な日本文化研究の第一人者である。

SOAS 図書館の10万冊以上にのぼる日本関連の蔵書は、文学、歴史、言語、宗教、芸術の分野が特に強く、主に学部生を対象とした英語で書かれた日本についての図書も充実している。イギリス国内の他大学に加えて早稲田大学の図書館とも相互貸借を行い、研究に便利な環境が整えられている。日本および韓国に関連する図書担当の司書である小林富士子氏によると、これからの課題はオンラインリソー

スの活用を促進し、特に所蔵資料をデジタル化して発信することにあるということだ。SOAS 図書館では組織の再編が進められており、分野ごとの司書、例えば日本関連の図書だけを担当する司書といったポストが今後も存続するかどうかは、日本を含む地域研究がこれからどの方向に発展していくかにかかっているといえるだろう。

シェフィールド大学日本研究所

シェフィールド大学日本研究所では、グレン・フック教授と武田宏子教授にお話をうかがった。シェフィールド大学日本研究所は1963年に設立され、日本語を社会科学とともに習得する課程をイギリスで最初に設置した教育機関であり、特に現代日本の政治、経済、国際関係に重点を置いた教育研究活動を行っている。日本研究で学位を取る学生は、シェフィールド大学で3年間日本語と日本の社会や文化について学ぶことに加えて、1年間の日本の提携大学での研修が課せられている。両教授によると同大学で日本研究を専攻する学生の水準はここ5年で向上してきており、約40名の入学者のうち日本語既習者の占める割合も増加しているということだ。卒業後はJETプログラム（日本の中学・高校で語学指導を行う事業）に参加してさらに日本語と日本について学びたいという学生も増えているようだ。

また、シェフィールド大学は今年に入って同じイギリス北部にあるリーズ大学と共同でホワイトローズ東アジアセンター（White Rose East Asia Centre）を設立した。同センターは国立日本研究所と国立中国研究所からなる修士課程と博士課程を擁する研究機関であり、国立日本研究所では主に現代日本の社会、文化、政治、経済について、ビジネス界や外交界との密接なつながりをいかして学問の世界のみにとどまらない広範な研究活動を行う人材の養成を目的としている。国内外の研究者によるセミナー、ワークショップ、学会を主催し、オンライン教育にも力を入れていくということだ。フック、武田両教授はまた、ヨーロッパにおける日本研究の現状（歴史、経済、文学、政治、国際関係の各分野）についてリーズ大学、ライデン大学、ミュンヘン大学とともに国際共同研究を開始したということで、研究の成果が待ち望まれる。

オックスフォード大学日産日本問題研究所

オックスフォード大学セント・アントニーズ・カレッジの日産日本問題研究所（Nissan Institute of Japanese Studies）は日産自動車の出資により1981年に設立され、これまでに日本関係の分野で約80名の博士を輩出しているヨーロッパ有数の社会科学系の日本研究の拠点である。所長のアン・ワズオ教授は特に日本の農民と農村の研究で知られるアメリカ出身の歴史学者であり、長塚節の『土』の英訳なども出版している。ワズオ教授によると、1960年代までは大学における日本研究は古典文学か外交政策のいずれかに限られていたが、現在では地域研究に限らずさまざまな学問分野で日本のことが扱われるようになったため、これからの日本研究は標準化と特殊化のバランスをいかに保つかが重要になるだろうということだ。また、最近の傾向として日本とヨーロッパ諸国を、例えば農業政策や教育制度の点などで比較する研究が盛んになってきており、これはアメリカというさまざまな意味で特殊な国と比較した場合よりもより有効な分析ができるためだろうというのがワズオ教授の見解だ。同研究所は経済、社会人類学、政治学、歴史学を専門とする5名のフェローを擁し、ラウトレッジ社から日本研究シリーズとしてこれまでに65巻にのぼる研究書を出版している。

オックスフォード大学ボドリアン図書館は納本図書館（イギリス国内のすべての出版物の献本を受けられる権利を有する6つの図書館）の一つであるため、英語で出版された日本関係の図書はすべて所蔵されている。ボドリアン図書館附属日本研究図書館は約107,000冊の日本関連の図書を所蔵しており、その8割以上を占める日本語の図書をあわせると、社会科学系の日本関連の図書ではヨーロッパ最大のコレクションを誇る。館長のイズミ・タイトラー氏によると、ボドリアン図書館の和書コレクションは

ヨーロッパ有数の長い歴史を持ち、1629年には嵯峨本3冊が寄贈され、17世紀末までには稀覯本キリシタン版や家康がイギリス東インド会社に宛てた朱印状などが加わり、その後奈良絵本14点や大部の仏教書のコレクションなどが収集されたという。同大学の東洋学部日本研究講座を充実させるために人文・古典研究中心の図書の収集が組織的に始められたのは1957年からで、その後社会科学分野が加えられていった。タイトラー氏は大英図書館を含むイギリスの16の図書館からなるジャパン・ライブラリー・グループ（1966年設立）の会長も務め、イギリスにおける日本研究関連図書の組織的収集と有効的活用を推進する立役者でもある。

今回訪れたいずれの大学でも、日本語や日本の社会と文化について学びたいという学生はここ数年も減少していないということで、関心分野も最新テクノロジーやマンガ、アニメを始めとする現代日本に関する事象全般に広がりつつあるようだ。イギリスにとって日本は現在も中国、中東に次ぐ外交上重要ないわゆる非西洋地域であるとみなされていることから、今後もイギリスが優れた日本研究の拠点であり続けることは確かだろう。グローバル化が進み地域研究のあり方自体が根本的に問い直されている今日、イギリスにおける日本研究も大きな転換期を迎えていることを強く感じた訪問であった。最後になったが、夏休み中にもかかわらずわざわざ貴重な時間を割いて快くインタビューに応じていただいた方々に深く感謝申し上げます。